

[5] 支部だより

北海道支部

(H19, H21) 大塚 健太

北海道支部では、今年度の会合を7月8日(金)に札幌市内で開催致しました。

参加者は、評議員を務めて頂いている高谷弘氏(34)及び臼井幸彦氏(43, 45, H13)、北海道支部長を務めて頂いている川合紀章氏(54, 56)をはじめ、西村浩二氏(61, 63)、石川達也氏(62, H1)、山田菊子氏(H1, H3)、笠井秀男氏(H3, H5)、林憲裕氏(H5)、本田肇氏(H8, H10)、阿部孝章氏(H20, H22)、石原央之氏(H25, H27)そして大塚(H19, H21)の12名でした。川合支部長が大学時代のサッカー仲間と海外遠征に赴く話をはじめ、諸先輩方の充実したプライベートの様子を拝聴させて頂き、世代や業種を越えた交流の場として、大いに盛り上がりました。



最近の話題ですが、私が初めて北の大地に足を踏み入れた8年前に比べ、海外からの、とりわけ東アジアからの旅行者が非常に増えたことを実感しております。富良野のラベンダー畑や小樽運河といったメジャーな観光地のみならず、知る人ぞ知る秘湯や、近所のスキー場で見かける旅行者の方もおり、北海道の観光のポテンシャルの大きさを実感しております。

また、今年3月には新青森～新函館北斗間が開通し、ついに北海道に新幹線がやってきました。新幹線カラーは道民の愛するファイターズのユニフォームにも採用され、2月のさっぽろ雪まつりでは巨大な雪像が新幹線の開業を歓迎し、GLAYがテーマソングを作りました。札幌延伸は2030年度予定とまだ先ですが、新潟在住の私の両親のように飛行機が苦手な旅行者にとっては、大変有難い存在です。

古くからアイヌの人々が独自の文化や伝統を育んでいた北海道においては、明治4年の開拓使設置以降、全くの原野である札幌の建設から開拓の歴史がスタートしました。列強から日本を守ることに、明治維新によって地位や職を失った武士を救済することが当初の開拓の目的であり、そして戦後間もなくは、深刻な食糧不足の解消と、復員者の定住の場の確保が目的となりました。

このように我が国の転換期を支えてきた北海道にて、日本の元気を支える仕事に取組む同窓生が数多くいらっしゃ

ることは、非常に光栄なことと感じております。

仕事外でも、内地から、或いは海外から訪れる人へ「おもてなし」を尽くすことが重要と感じております。支部会合でもオススメのお店や観光地の話題が絶えませんでした。ここでしか体験できない「味」と「風景」が皆様をお待ちしております。

ぜひ1度、(新幹線も使って)足を運んで頂けると幸いです。

東北支部

(H5) 和田 宙司

東日本大震災から約5年半が経過しました。今回の震災では、高規格道路は支援物資の輸送ルートとして機能するとともに、津波避難場所や津波防護工としての役割も果たしました。このため、東北地方の道路計画の多くが、震災後に復興道路や復興支援道路として事業化されました。具体的には、仙台から八戸を結ぶ三陸沿岸道路、内陸と太平洋沿岸地域を結ぶ宮古盛岡横断道路、釜石花巻道路、相馬福島道路の総延長584kmのうち236kmが震災後に事業化されています。復興庁の資料によれば、平成28年3月時点で、総延長に対して着工率は98%、共用開始区間は42%となっています。これらの道路は震災対応としてはもちろん、地域の活性化も大いに期待されます。

さて、本題の東北支部の活動状況ですが、1月20日に新年会を開催しました。今回は山形や岩手からも参加頂き、古株の方、新規加入の方と交じり合い、和気あいあいと飲み会しました。東北支部は対象面積6.7万km²と、北海道支部には及びませんが、京土会第2位の面積を誇るとともに、復興需要に伴う人の流れにより毎年の会員の出入りが激しく、なかなか会員全員を把握できない状況ではありますが、友達紹介という昔ながらのネットワークで会員名簿を構築しています。京土会東北支部はこれからも、気軽に参加できるフレンドリーな活動を続けて行きたいと思っております。今回、新年会に参加頂いた方は次ぎのとおりです。遠藤さん(49, 52)、村上さん(55)、小林さん(55)、武政さん(57, 59)、前田さん(59, 61)、奥村さん(59, 61)、久田さん(H2)、田中さん(H3, H5)、加藤さん(H4)、和田(H5)、島村さん(H6, H8)、福知さん(H7)、伊藤さん(H7, H9)、柴田さん(H9)、田中さん(H13)。



新年会写真 (H28.1.20)

東京支部

支部長 (43, 45) 大石久和

東京支部の支部長をしております。昭和43年学部卒業、昭和45年修士修了の大石久和でございます。特別講演の関さんの若干の先輩であります。彼も話の途中で言っておりましたが、彼が初代の内閣危機管理監室に出向したときは、「土木に何ができるんだ、余計なもんが来た」という雰囲気だったのです。ところが1年ほど経つと、私も知りあいの内閣危機管理監が、「関さんがいなかったら内閣危機管理監室はどうなっていたか」というくらいの活躍をしてくれまして、土木の名声を高めていただいた。警察庁で警視総監だった方がトップだったのですが、その方から私に感謝の言葉をいただきました。ということをちょっとご紹介して、いまの講師がどういう人間だったかをご理解していただければと思います。



まず東京支部の状況を申し上げて、あとで頼まれてもいないのにちょっと余計な話をするかも知れませんが……。東京支部は関東1都6県に住所または勤務先がある3,500名で構成しています。ここ数年、数は変わっておりません。昨年は6月1日に京都大学の東京オフィスで支部総会を開きました。小林潔司先生にお越しいただきましたし、金哲佑先生にもお越しいただきました。

例年は春の総会だけなのですが、昨年は機運が盛り上がりまして、秋にも集まろうということになりました。11月25日に京都大学の東京オフィスで——いまはなくなってしまい、新丸ビルに移ってしまったのですが、そこで開催して180名の方に参加していただきました。先程の関さんの話に出ました足立敏之さんにも少し話をさせていただきました。

支部会員の活動状況は、衆議院議員では皆様よくご存じのついでこのあいだまでの国土交通大臣であった太田昭宏先生(S43)、それから足立康史先生(S63)や井林辰憲先生(H12)が頑張っておられます。参議院議員では、国土交通大臣を務められた前田武志先生や佐藤信秋先生が頑張っておられます。

国土交通省の事で恐縮ですが、国土交通省では大脇崇技術総括審議官(S56)、塩路勝久下水道部長(S56)、北本正

行国土政策局官房審議官(S56)、清水喜代志都市局官房審議官(S56)が本省にあります。茅野牧夫氏(S58)が中部地方整備局長、それから石橋良啓氏(S56)が四国地方整備局長を務めておられます。残念なことに、本省の局長以上のポジションにいるのが、いまは旧運輸省系の技術総括審議官の大脇崇さんだけです。旧建設省系では局長以上、審議官級のポストにいま京土会の人間がおりません。スーパーゼネコンの副社長にも残念ながら一人もいません。それからそのつぎにランクされるような中堅ゼネコンの社長にもいません。ということでやや残念な状況です。

省庁再編のときには、ほとんどの京都大学の卒業生が荒波を乗り越えており、道路局長も河川局長も港湾局長もみな京都大学の出身者だったのですが、現在は残念ながらおりません。しかし、次の世代に登場する今の室長、あるいは企画官クラスには優秀な方がそろっています。まもなく京都大学の連中が国土交通省の中心メンバーになってくれるのではないかと考えております。

報告は以上ですが、私は関さんが言ったことはまさしくそうだと思うのです。彼が伝えたかったメッセージもそれだと思うのですが、2年前に東京支部の報告をさせていただいたときも申しあげました。「土木のスコープが狭いのではないか」ということです。あるいは、「カバレッジ」と言ってもいいし、「カテゴリー」と言ってもいいかもしれない。もうすこし広げていただきたい。それを京都大学にぜひ期待したいのです。

私は東京にいるものですから、東京大学の土木の動きはよくわかっているのですが、残念ながらあまり期待できないのです。相手は私が京都だから言うのでしょうか、「大石さん、京都のほうが広くないよ」という人がいるのですよ。そんなことはないだろうと思うのですが、土木という世界は狭い世界でちょこちょことしているのではないかと考えております。

「土木とはなにか」を考えてみると、偉大な自然の営みのなかで人間の生存領域を確保する、そういう学問や技術、体系だという位置づけもできる。あるいは国土に働きかけて、国土から安全や効率、快適という恵みをいただく。そのための学問・技術および、その体系全体であるという定義の仕方もできるとすると、まだまだすべきことがたくさんある。

これは工学でいうと、機械や電気がやってくれるという世界ではないのです。あるいは、社会科学のメンバー、法学部や経済学部の連中がカバーしてくれるかということ、残念ながらカバーできない。ということになると、国民の安全や効率のために土木がカバー領域を拡げて、国民を手助けするしかないのではないかと考えております。京都大学土木の先生方にぜひお願いしたいのです。京都大学の土木が一番広い世界に展開しているというように進めていただきたいと思います。

ここから私事のお願いです。6月10日に、私が土木学会の次期会長に指名されることになりまして、一年後には会

長を務めなければなりません。研究実績もなにもない、行政経験しかない私が務めるのは不遜の極みではありますが……。めぐりあわせでそういうことになってしまいました。ぜひ、京土会の皆様方には、この土木学会の活動をさらに支援していただきたい。このようにお願いする次第であります。どうもありがとうございました。

千葉支部

幹事 (H4, H6) 辰見 夕一

千葉支部では、3月9日に第26回目の懇親会を例年通り千葉駅傍の京葉銀行文化プラザにて開催し、今年は25名の卒業生が集まりました。今回ご参加頂いた方々は昭和40年卒の住田陸快氏から平成24年卒の高田雄大氏まで、47年次に渡って実に幅広い年齢層の懇親会となりました。

懇親会では、恒例行事として参加者全員がショートスピーチで最近の近況や思いなどを自由に報告頂いております。話題は仕事や趣味、家族や健康などですが、幅広い年齢層のため同じテーマでもその内容は多岐にわたり、時間を忘れて盛り上がりました。

当支部の懇親会の雰囲気そのままお伝えしたく、今回は、昭和41年卒の嶋津洋二氏に、現役時代に携わられたコンゴ民主共和国での橋梁建設工場の業務や、3年前に現地で行われた開通30年の式典にご参加されたお話について執筆をお願い致しましたのでここにご紹介させていただきます。



(41) 嶋津 洋二

幹事からショートスピーチをと云われ、3年前のことになるが、アフリカのザイル（現コンゴ民主共和国）での話をした。

ザイル共和国で、1979年から約4年を掛けてIHIがコンソーシアムリーダーとなって世界第二の大河コンゴ河に吊橋を掛け、私も下部工担当としてこの工事に参画した。発注者であるザイル政府運輸省に日本の国鉄、本四公団から、多数の技術者が専門家として派遣された。超後進国での工事としては珍しく、工期を一年以上も短縮して無事完成させた。

平成25年6月、このマタディ橋の開通30年を祝う式典が開催され、日本から工事に携わった7名が自費で参加した。日本からベテラン（仏語では退役軍人の意味もある。ザイルの公用語は仏語）が来たことと報道され大歓迎された。皆んな完成後初めての訪問であったが、橋梁の維持管理が極めて良好になされているのを見て感動した。工事中に感じていたことではあるが、ザイル人は真面目で良く働く人達であった。完成時に残っていた維持管理マニュアルを忠実に守ってくれたのである。この30年の間には、前大統領が追放された内戦もあり、混乱を極めていたのも拘らず立派に橋を守った訳である。もっとも、この間に日本大使館も一時閉鎖された時期もあったが、ペイント供給などの無償援助は細々と続けられてはいたのではあったが。

マタディ橋を一望に見渡せる丘の上で、式典は行われたが、コンゴ国歌に続いて、アフリカの大地に「君が代」が鳴り響いた。この丘で、29年前に今上両陛下が皇太子時代に「火炎樹」を植樹されたが、今は大きく育ち、雨季には真紅の花を咲かせている。

このプロジェクトには、どういう訳か京土会のメンバーの多くが携わったが、ザイル人の優秀さを示すエピソードがある。京大土木の大学院を出て優秀な成績で国鉄に入社し、ザイルに派遣された職員が解けなかった微分方程式を、首都にあるキンシャサ大学を出たばかりの運輸省の新入職員が、さっと解いたと云う。

この式典の約1年後に、安倍総理が国連のアフリカ地域経済共同体の会合で、マタディ橋をスピーチで取り上げ、「日本はインフラを作らせたら、長持ちするものを作ります。もっと大切なことに、働く喜びや、努力の尊さを、人々の心に残します。30年後の再会を、涙して迎える友情をはぐくみます。マタディ橋の物語は、改めてそのことを教えてくれました。いま、日本は、次の世代に保守管理の技術を引き継ぐ支援を続けています。橋はコンゴ民主共和国と日本を結ぶ友情の印として、末永く生きていくことでしょ」と述べた。

私のショートスピーチの後、千葉支部のメンバーが、最近のケニアでの大型港湾工事の話をしてくれた。京土会のメンバーが、世界のあちこちで、また、サハラ以南のブラックアフリカで活躍していることを聞き、とても嬉しく感じた。

それにしても、このところアフリカでの日本の存在感が薄まり、中国のそれが強まっていることは気になることではある。

新潟支部

(60, 62) 木村 淳二

今回、新潟支部の大先輩である曾根隆夫様よりのご指名で新潟支部の近況報告をさせていただく鹿島建設北陸支店の木村淳二(60, 62)でございます。

新潟支部は現在、前新潟市長の長谷川義明様、元新潟県土木部長の山内勇喜男様をはじめとする正会員16名と、参議院議員の佐藤信秋様をはじめとする特別会員6名の計22名で構成されています。嬉しいことに平成20年以降の卒業生も4名加入していただき、若返りが図られているところで

す。当支部の主たる活動は年1回支部総会を開催し、情報交換を行うとともに世代を超えた親交を深めることであります。この総会では新潟駅前にあるニイガタステーションホテル社長の曾根様にいつもお世話になっており、この場をおかりして御礼を申し上げます。今年も3月8日に佐藤参議院議員様にもご臨席を賜り、盛況のうちに支部総会が開催されました。

当総会に参加させていただき、いつも感じることは、官庁や会社をリタイアされた方々のお元気なことと、話題の豊富さ（よく喋ること）であります。口下手な小職は大先輩方の話題についていくことが精一杯であり、いつも見習わなければならないと痛感しております。

会話の中では皆様の学生時代の京都での思い出話が沢山聞かれ、卒業後30年近くを新潟県内で勤務している小職にとっては非常に懐かしく、感慨深い夜であります。また、会話についてもお互い関西弁で喋りあえる少ない機会であり、年に一度関西弁を思い出させてくれる機会でもあります。

今後の目標は、毎回10名程度の参加者を15名程度まで広げ、日常から情報交換ができるネットワークの形成に取り組んでいきたいと考えております。

文末ながら、新潟にご宿泊の際は新潟駅前のニイガタステーションホテルをご利用いただければ幸いです。

東海支部

支部長 (38) 三木 常 義

東海支部は、愛知、岐阜、三重、静岡の4県に住所・勤務地がある会員を対象とし、毎年度総会を開催しております。今年度は、より多くの方にご参加いただけるよう会費を見直すとともに、会場を名古屋市中区のアイリス愛知に変更し、6月13日に開催しました。会員約50名が参加するとともに、本学からは工学研究科社会基盤工学専攻の戸田圭一教授と原田英治准教授にお越しいただきました。

総会開催にあたり、まず戸田教授から、桂に移転して10年目となる母校の近況をご紹介いただきました。各講座の先生方のご異動などの紹介に続き、国際コースをはじめとして外国人学生が増え、約36%の授業が英語で行われていることや大学院入試が英語で受験できるようになったことなど、母校の国際化が一段と進んでいる状況をお話いただきました。次に戸田教授が研究されている、水害発生時の車に関する話題をご紹介いただきました。水理実験用水路を用いた「半水没した車からの体験型避難実験」、「浸水

時の道路や地下駐車場での車の漂流に関する検討」や「氾濫時の自転車による避難実験」など、大変興味深い内容でした。参加者からは、平成12年の東海地方で発生した豪雨の被害時に、道路管理者として道路冠水などに対応した経験を踏まえた質問があるなど、有意義な意見交換の場となりました。

総会は大いに盛り上がり、会員相互の交流を深めることができました。来年度の総会にも楽しみにしたいと思います。

ここで、東海4県のインフラ整備の状況等について簡単にご紹介いたします。

高速道路については、新東名高速道路の浜松いなさJCT・豊田東JCT間55kmが2月に開通し、御殿場JCTから豊田JCTまでの約200kmがダブルネットワークとなりました。これにより、東名高速道路 三ヶ日JCT・豊田JCT間において頻発していた渋滞がほぼ解消され、地域に大きな効果をもたらしています。新名神高速道路の三重県区間については平成30年度の開通を目指して工事が進められています。この他、名古屋近郊において名古屋第二環状自動車道の西南部が、岐阜・三重においては東海環状自動車道の工事が進められています。

リニア中央新幹線については、平成39年の品川・名古屋間の開通に向け、各地で工事が始まっています。関係者間の調整が進められるなど、開業後のまちを見据えた取り組みが活発になっています。

中部国際空港（セントレア）は、LCCの新規就航が相次ぐとともに、国際線の就航便数が平成27年度に過去最高を記録しました。平成28年5月に三重県の賢島で開催された伊勢志摩サミットの際は、各国首脳を迎える玄関口として利用され、国際的にも注目を集めました。中部国際空港については、二本目滑走路を始めとする機能強化が課題となっており、早期実現に向け機運の高まりが待たれています。

東海地域における都市基盤の整備は、国全体の活性化につながるものです。安心して豊かな生活を営むことができる社会、国土の均衡ある発展、公共の福祉の増進を目指し、知恵を絞って取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

長野支部

幹事 (61) 青木 謙 通

長野支部は、平成28年度の京土会で承認された新たな支部であります。まわりを東京、新潟、東海、北陸の4つの支部に囲まれ、長野県に在住、在勤する会員のうち8名により発足しました。会員規模は、東京支部の1/500程度の小さな支部です。これまで、長野県に在住する京土会員については、長野支部発足以前は、所属する支部がなく、現在18ある支部としては、おそらく四半世紀ぶりの新たな支部ではないかと思えます。



さて、長野県は海に接していない県であるとともに、ご存知のとおり、1998年（平成10年）に開催された冬季長野オリンピックを契機に、北陸新幹線や上信越道・長野道などの高速交通網が暫定的に整備をされました。それより、18年の歳月が経過したわけですが、昨年、平成27年3月には北陸新幹線が長野から金沢まで延伸され、県内唯一である飯山駅が開業をしました。また、リニア中央新幹線の品川・名古屋間の工事実施計画が国土交通大臣に認可され、11年後の平成39年に工事を完了すべく、県内において工事に着手をしたところであり、県南部の飯田市には、新幹線駅が設置される予定で、開業後を見据えたまちづくりの取り組みが活発となり、期待を集めているところです。

支部は、本年2月に長野市内で支部設立準備会を開催しました。今後の活動については、年1回の総会を開催するとともに、会員の要望に基づいた活動を展開する予定であります。長野県に在勤、在住する京土会員で支部活動のご案内をお届けできていない方は、お手数ですが下記担当者までご一報をお願いいたします。

結びに、京土会会員の皆様方のご活躍とご発展を祈念し、近況報告といたします。

連絡先（勤務先）

〒380-0836 長野市南長野南県町686-1
 長野県 長野建設事務所 整備課 青木 謙通
 電話 026-234-9543
 Mail aoki-kanemichi@pref.nagano.lg.jp

北 陸 支 部

(H4) 市 森 友 明

北陸支部は、富山県、石川県、福井県の3県にまたがる地域であり、平成28年7月現在で81名の会員を有しています。

1. 北陸支部第30回支部総会

北陸支部第30回支部総会は、平成28年7月9日(土)、福井市の福井県国際交流会館で開催されました。各県担当幹事の皆様のご協力もあり、3県から18名の会員にご参加いただきました。

はじめに金沢大学名誉教授 北浦勝支部長（42, 44, 47）のご挨拶をいただき、その後、開催県である坂川建設協会長（前 助福井県建設技術公社理事長）の近藤幸次様（48）から開会のご挨拶をいただきました。総会では、各議案が順調に審議・承認されました。

2. 講演会、懇親会

総会に引続き講演会が行われ、「福井駅周辺の交通とまちづくり」と題して福井市都市戦略部次長 三谷清様（59, 61）ご講演いただきました。



平成28年7月9日
ご講演される福井市都市戦略部次長 三谷 清 様



平成28年7月9日 講演会の様子

福井駅周辺における土地区画整理事業や交通関係事業、福井駅付近連続立体交差事業、北陸新幹線整備、福井城址公園の整備などについてお話いただきました。

平成30年福井国体、平成34年北陸新幹線の敦賀駅までの開業に向けて、福井駅周辺では東口広場、西口広場の整備が進められており、平成28年春には駅前再開発事業として商業施設ハピリンや屋根付き広場ハピテラスなどの施設がオープンし、まちなかの賑わいづくりの施設として活用されていることをご紹介されました。交通関係では、これまで福井駅より中央通り沿いに並んでいた路線バスのりばを西口広場にバスターミナルを整備され、新バスロケーションシステムや広域バスナビゲーションシステムの導入したことによりバス利用者の利便性向上による利用客増や利用頻度の向上につながったことをご紹介されました。

三谷様には、第27回（平成25年開催）の際にも「福井県

の地方鉄道の現状と相互乗り入れ事業について」と題しご講演いただき、それから3年が経過し、変わりゆく福井駅周辺の様子を窺い知ることができました。三谷様、ありがとうございました。

総会終了後、懇親会会場までの移動の際には、福井県の名所である養浩館庭園、福井市郷土歴史博物館、舎人門を通るルートで、まちなか散策を楽しみました。懇親会では、福井県を代表して(公財)福井県建設技術公社理事長(前福井県土木部長)幸道隆治様(52, 54)に開会のご挨拶をいただき、富山県土木部次長村岡清孝様(56)の乾杯で開宴となりました。宴会中は年に一度の顔合わせということで、恒例の各自の近況報告もあり、様々な話題で大いに盛り上がりました。最後に次回開催県を代表し、金沢大学名誉教授石田啓様(47, 50)のご発声中締めとなりました。

3. おわりに

去る平成27年3月14日に待望の北陸新幹線が開業し、金沢・富山は観光客やビジネス客で大いに賑わっております。他支部の会員の方々にもこれを契機に是非北陸に訪れていただきたいと思っております。また富山駅は現在でも工事が継続されており、数年後に在来線の高架化や路面電車の南北開通が完成する見込みです。北陸新幹線は北陸地方のみならず、災害時の太平洋側交通のバイパス機能としての効果が期待されており、日本海国土軸の形成とも相まって、福井県内のルートの早期計画決定と関西までの開通が待ち遠しいかぎりです。北陸地方を含む日本海沿岸地域のさらなる発展のため、我々北陸支部会員はそれぞれの立場で切磋琢磨していきたいと考えております。以上で北陸支部の報告とさせていただきます。



平成28年7月9日 支部総会出席者の皆様

京 滋 支 部

支部長(53, 56) 中 村 敬 二

本年度京滋支部の支部長をおおせつかりました京都府中丹広域振興局長の中村です。

京滋支部の幹事は、京都大学、京都市、京都府、立命館大学の輪番制となっており、オリンピックイヤーは京都府が当番となります。よろしくお願ひします。

まず、昨年(平成27年度)の支部活動のご報告ですが、11月10日に田辺カントリークラブにおいて第36回石原杯争奪ゴルフ大会を、同月13日に京都ガーデンパレスにおいて支部総会・懇親会を開催しました。総会では都市社会学専攻の清野純史教授及び都市環境工学専攻の米田稔教授の両先生から近況報告もいただき、石原杯優勝者の久米生泰様(60)へ優勝カップ授与が行われた後、富田實様(28)に乾杯の御発声をいただいて終始和やかな懇親会となりました。

次に、京滋の近況ですが、京都府では、今『もうひとつの京都』というキャンペーンを展開しています。国外や他府県の方々にとって、京都府のイメージは恐らく京都市内を中心とする「古都京都」であろうと思います。しかしながら、南北130km、東西20kmという細長い地形の中で、北部には日本三景天橋立、伊根の舟屋といった素晴らしい自然や伝統的建築物があり、中部には北山杉や丹波栗といった農林業の生産地があり、南部には宇治茶を代表とする茶の文化と最先端技術の関西文化学術研究都市を有する地域があります。

そして、これらの地域には、それぞれの歴史と物語があり、これを広く知っていただくため、それぞれ「海の京都」「森の京都」「お茶の京都」と位置づけて、拠点の再整備を行い、それらを有機的に結んでいき、文化庁の移転する千年の都「京都」ともコラボレーションさせることで、京都府の魅力を総合的に発信し、交流人口の拡大を図ろうとする取り組みであります。

こうした中、これらの拠点を結ぶ上で、まさに京都府の背骨となる京都縦貫自動車道が昨年7月によりやく全線開通しました。名神大山崎JCTから北部の宮津市までが高速道路で直結されるタイミングに併せ、昨年は「海の京都」をターゲットイヤーとして重点的に取り組み、交流人口の大幅な増加など大きな反響があったところです。

また、京都府北部地域には、関西圏で唯一の日本海側の重要港湾である京都舞鶴港があります。平成23年に日本海側拠点港の一つとして選定を受け、小さいながらも昨年には日韓露の国際フェリーが新規就航し、クルーズ船も今年は10回の日本海周遊クルーズなど過去最高17回の寄港、さらに来年度は日本海周遊32回を含め40回を超える寄港数となる等、京都、さらには関西の日本海側玄関港として成長を続けています。

近年の港湾物流の動向を見ましても、世界におけるコンテナ取扱量は、現在、上海・シンガポール・深圳といったアジアの港が世界の上位を占め、釜山港も世界に冠たるハブ港としての地位を確立しています。日本がこういったアジアの港と対抗していくためには、京都舞鶴港など規模は小さいけれども良質な港が並んでいる日本海側を日本海国土軸でつないで連携し、総合力を発揮していくことが重要です。京都府としては、京都舞鶴港などの拠点整備とともに、日本海国土軸と太平洋側国土軸を連絡する京都縦貫自動車道などの高速道路網整備に力を注いでおり、今年の秋には、

府で工事を進めてきた京都縦貫自動車道の北進となる山陰近畿自動車道の宮津市～京丹後市間も開通したところです。さらに、来年には新名神高速道路の城陽～八幡間の開通も予定されており、これにより府最北端の京丹後市と最南端の木津川市が高速道路で直結するなど、府域の高速道路網の益々の充実が図られています。

今後とも、過疎あり、古都あり、新都市ありと、地方創生のテーマが縮図的に詰まっている細長い京都府ですが、新たな環日本海時代も意識しつつ、地域格差のない安心・安全な京都府を目指して施策展開してまいりますので、引き続き京土会の皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様の益々のご活躍と京土会の発展をお祈り申し上げまして、京滋支部からの近況報告とさせていただきます。

奈良支部

(56, 58) 金剛一智

奈良支部は県内の観光地を巡る「散策会」を活動の柱として親睦を図っています。さて観光地「奈良」というものの、大仏商法と揶揄されるように実はこれまでおもてなしの環境整備の努力を怠ってきたことが大きな弱みになっています。宿泊施設の客室数は全国的にも非常に少ないため日帰りの観光客が多く、オフシーズンには観光客数が大きく落ち込みます。いっぽう奈良の歴史・自然・文化は世界的に見ても非常にユニークであり、これらの地域資源は大きな強みです。この奈良で最近、観光関連施設の整備が活発になっています。道路・河川が観光に果たす役割はもとよりですが、今回はこれら施設についてご紹介いたします。明日香村では9月に国営キトラ古墳壁画体験館四神の館がオープンし、地元で壁画が見られると話題になりました。また星野リゾートも計画されています。これらの誘致に尽力された明日香村長は京土会奈良支部のメンバーです。また県で誘致に成功した世界最高級のホテルJWマリオットが2020年開業します。他のホテルチェーンへの誘発効果も期待されます。隣接地では大林組を中心とするSPCが県のコンベンション拠点を整備します。奈良公園では渋滞解消のため、風致景観と調和した美しいデザインの観光バスターミナルが整備されます。公園の中心にある由緒ある知事官舎や付近の建物はPFIによりグレードの高い宿泊施設・レストラン等に生まれ変わります。秋の鹿の角きりで有名な鹿苑も鹿と自然に親しむ一大拠点として再整備中です。奈良公園の鹿は神様の使い・天然記念物として大切にされています。さらに最近では中国の観光客からは「鹿」が「禄」と音が同じで金運が良くなると大人気ようです。奈良公園から車で5分の平城宮跡では国営公園整備が着々と進み、大極殿院など往時の偉容が姿をあらわしつつあります。ユニークなのは奈良公園にも近く、明治の五大監獄として今

も当初の建物が唯一フルセットで残っている奈良少年刑務所がまもなく閉鎖されそのままホテルにリニューアルされるということです。地方創生で全国各地域が競っています。これまで観光面でソフト・ハードとも周回遅れであった奈良は千数百年蓄えてきた資源・魅力をもっと掘り起こしてこれから輝いていくと期待しています。奈良支部もこのような地域のメンバーとして誇りを持ち、お互いの強みを活かして協力して活動していきたいと思っております。

大阪支部

幹事 (55) 川田均

大阪支部幹事を務めております昭和55年卒の大阪市都市計画局長の川田です。大阪支部の近況についてご報告いたします。大阪支部は、大阪府、奈良県、和歌山県の3府県に居住、あるいは勤務されている方々で構成されております。



昨年度の活動といたしましては、支部例会を昨年11月25日にホテルグランヴィア大阪で開催いたしました。当日は、白石先生、今本先生の2名の名誉教授の先生方と、谷口先生、細田先生、米田先生、大下先生の合計6名の先生方にご臨席賜りまして、産学官から幅広く約140名のご参加をいただき、交流を深めることができました。

また、幹事も交代し、昭和55年卒の大成建設の加賀田様と、同じく昭和55年卒の私、大阪市の川田が新しく幹事を務めることになりました。どうぞよろしく願いいたします。

続きまして、支部会員の主な方々の昨年度総会以降の異動でございますが、大阪府では、昭和57年卒の青木誠様が都市整備部理事として阪神高速道路株式会社本部長付部長に就任されました。大阪市では、昭和55年卒の永井様が建設局長に、同じく昭和55年卒の塩谷様が交通局長に就任されました。また、阪神高速道路(株)では、昭和45年卒の幸様が、今月下旬の株主総会後に代表取締役社長にご就任される予定です。

続きまして、大阪の近況報告ですが、まず、都市開発関係からご紹介いたします。

関西の発展を牽引する新しい拠点であるJR大阪駅北側の

「うめきた」地区ですが、3年前に先行開業している東側の「グランフロント大阪」は、3年で来場者数も1億5千万人を突破し、非常に盛況であります。

その西側、2期区域は、約8haの緑地を大胆に確保する「みどり」と「イノベーション」の融合拠点を「まちづくりの方針」として、昨年度より土地区画整理事業や関空アクセスとなるJR東海道線支線の新大阪からうめきた新駅～環状線に至る区間の地下化事業に着手しました。

今年度には、第一次コンペの優秀提案者20者の中から、2次提案を募り、最終の開発事業者を決定し、平成35年春には新駅を開業、順次「まちびらき」を行う予定です。

次に、ベイエリア開発ですが、夢洲・咲洲地区の一つのテーマである、環境・エネルギー分野等の産業立地を進めており、先月、世界最大級の大型蓄電池システム試験・評価施設NITEのNLABが咲洲にオープンし、エネルギー関連企業の関心を集めており、今後、地区活性化の起爆剤として期待されます。

夢洲地区では、統合型リゾートIRの整備をめざし一関連法案は国会で継続審議中ではありますが一最大200haの区域を対象に、先月、事業アイデア募集Request for Conceptを開始し、関西圏における新たな国際的な観光拠点づくりを進めています。

また、まちづくりはハード整備だけでなくソフト面、持続可能で魅力的な運営が重要になってきており、民主体のエリアマネジメントの推進をしています。日本で初めて、いわゆる大阪版BID制度をつくり、平成27年4月からグランフロント大阪TMOに適用を開始しています。

現在、大阪市内では、梅田地区のほか、中之島、御堂筋、なんば、大阪ビジネスパーク地区など各所でエリアマネジメント活動が盛んになってきており、これらの取り組みが相乗効果を生み出し、大阪全体のさらなるバリューアップにつながるような官民協働の推進体制づくりを進めています。

こうした都市開発のプロモーションを国際的に行うため、フランスのリード・ミデム社が世界的に展開している国際不動産見本市(MIPIM)の大阪誘致が成功し、今年9月にグランフロント大阪にて開催予定で、京阪神3都市のメイヤーズサミットなども企画し、大阪・関西のまちづくりや観光魅力のPRを行う予定です。

つづいて、インフラ関係ですが、まず関西国際空港に関しては、LCCの積極誘致や円安を背景にしたインバウンドの増大により、平成27年度では、総旅客数が2,321万人、国際線旅客数が過去最高1,625万人、うち外国人旅客数は1,000万人を超え、外国人入国者と営業利益が成田空港を初めて抜きました。

今年4月からは、コンセッションにより新たに運営権を取得した関西エアポート株式会社により関空と伊丹空港の一体的な運営、新しいターミナルビルの建設計画などさらなる成長に向けた投資が期待されています。

関空が空の玄関口として発展する中、鉄道については、

関空と大阪都心とのアクセス強化や新幹線網の整備により大阪を中心とした関西圏の都市構造の強化を進めています。

関空アクセス鉄道として、「うめきた新駅」からJR難波と南海難波を結ぶ地下鉄新線「なにわ筋線」の早期事業化に向け、JRさん南海さんと鋭意検討を進めており、これができるれば関空とうめきたが最短で約40分で直結することとなります。

また、リニア中央新幹線については、大阪府・市、経済界とで、全線同時開業をめざした取り組みを進めており、先日「骨太の方針」で、大阪までの前倒し整備に財投資金の活用を検討することが盛り込まれ、一歩前進したところです。

北陸新幹線の大阪までの早期整備についても、リニア同様経済団体と一緒に取り組みを進めており、ようやく年末までにルートが確定するところまでできました。

関西圏の飛躍と日本全体の国際競争力強化にとって、これらの広域インフラ事業は極めて重要ですので、京土会の皆様がたの応援をぜひ頂戴したいと存じます。

なお、都市鉄道としては大阪外環状線、「おおさか東線」の放出から新大阪への延伸は平成30年度末の開業めざし工事が順調に進んでおり、また、北大阪急行の千里中央から新箕面駅までの延伸事業も今年度着工する予定で、平成32年度には完成予定です。

次に、高速道路についてですが、新名神高速道路、神戸～高槻間とそのアクセス道路は平成28年度供用を目標に整備を進めており、阪神高速については、事業中の大和川線や淀川左岸線2期区間の進捗をはかるとともに、これらの路線と一体となり大阪都市再生環状道路を形成する淀川左岸線延伸部は今年の秋に都市計画決定を予定しており、平成29年度の事業着手に向けて取り組んでいます。

また、平成29年度当初を目途として新たな高速道路料金として、事業主体を超えたシームレスで、新規路線整備も可能とする新たな料金体系の導入に向け、国、関係機関とともに検討を進めています。

次に、災害対策についてですが、南海トラフ巨大地震による液状化で防潮堤が被害を受けることで、大阪府域では約1万ヘクタールの浸水、13万人の死者という甚大な被害が想定されています。

そのため、防潮堤の液状化対策を、約47km、約1100億円の計画規模で、平成26年度より概ね10年間で取り組むこととしており、平成26年度からは、地震発生直後から浸水する恐れのある箇所、約9kmの防潮堤の液状化対策について、先行的に取り組んでおり今年度の完成をめざしています。

最後になりますが、土木を取り巻く情勢は、新しいプロジェクト企画からインフラの老朽化、防災対策など困難な課題が山積していますが、産学官が連携・協力して課題解決に取り組んでいくことが必要であり、京土会の果たすべき役割がより一層重要となってきております。

大阪支部といたしましては、今後も、大阪・関西の成長に一翼を担えるよう、活動を続けて参りたいと考えており

ます。今年度の大阪支部の例会は11月30日の開催を予定しており、過年度同様、多数の皆様にご出席いただきとされており、京土会活動を大いに盛り上げていけるよう努めてまいりたいと考えております。

京土会の皆様方には、今後とも、より一層のご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

神戸支部

支部長 (53, 55) 山崎 聡 一

神戸支部は、兵庫県下に在住・在勤の会員約1,100人で構成されており、年に1度、支部総会・見学会などを開催しています。昨年の支部総会は、11月24日に三宮のホテルモントレ神戸において、会員約60名の出席のもと開催しました。総会には、大学から都市社会工学専攻の三村衛教授 (56, 58) と社会基盤工学専攻の松村政秀准教授の両先生にお越しいただき、交流を深めることができました。総会に先立ち、講師としてお招きした、日建設計総合研究所の石原克治理事 (58, 60) から、「PPPと街づくり」と題して公民連携のまちづくりなどについてご講演をいただきました。また、同日、阪神電鉄連続立体交差事業（青木駅周辺）の現場見学会も開催しました。

ここで、最近の神戸支部関係のインフラ整備等の状況をご紹介します。

道路関係では、広域交流や産業発展につながる基幹道路のミッシングリンクの解消に努めています。今年度、大阪湾岸道路西伸部が新規事業着手されました。早期の整備完了に向け、有料道路事業の導入や建設コストの縮減などを国に働きかけていきます。名神湾岸連絡線については、早期の都市計画手続きの着手を目指します。播磨臨海地域道路については、本年5月に優先区間が選定されました。早期の事業着手に向け、国・県の役割分担を図り、ルート等の検討を進めています。

防災・減災対策関係では、南海トラフ地震による津波に備えるため、兵庫県が昨年6月に策定した「津波防災インフラ整備計画」に基づき、防潮堤の沈下対策や防潮水門の整備・耐震化等の津波対策を推進しており、平成35年度までに概ね完了を目指しています。神戸市でも、昭和39年～40年の台風で甚大な被害を受けたことから、昭和40年度から本格的に高潮事業に着手し防潮堤等の整備を進め、昨年度完了しました。引き続き、南海トラフ地震に伴う津波対策について、概ね5カ年で既存の防潮堤等をねばり強い構造に補強する対策を進めています。

また、頻発する風水害に備え、平成26年8月豪雨災害等を踏まえた再度災害防止対策や、平成24年4月に施行した総合治水条例により策定した「地域総合治水推進計画」に基づく対策を進めています。

2017年に開港150年を迎える神戸港では、外国客船の増

加、大型化に対応するため、16万トン級の大型客船が着岸できるポートターミナルに加え、対岸の神戸ハーバーランドや六甲山などミナト神戸の風景を楽しめる絶好の立地にある中突堤を5万トン級から一回り大きい7万トン級の大型客船に対応できるよう、ドルフィンを新たに整備しました。

水道関係では、阪神・淡路大震災後から進めてきた「大容量送水管整備事業」が完了し、本年3月に完成式典が開催されました。大容量送水管は、平常時は水を送る基幹施設として、地震等災害時には、飲料水や消火用水などを供給する給水拠点として、市民の生活を支える施設となっています。

以上が神戸支部をめぐるインフラ等の整備の現状です。

本年4月の熊本地震では、改めて自然の脅威と危機管理の重要性を痛感させられました。近い将来発生が懸念される南海トラフ地震などによる被害を最小限に抑えられるよう、引き続き防災力の向上に取り組んでいきたいと思っております。

最後に、支部会員の益々のご活躍と京土会の発展をお祈り申し上げるとともに、支部活動への引き続きのご協力をよろしくお願いいたします。

岡山支部

幹事長 (61) 長尾 俊彦

皆様ご承知のとおり、去る4月14日及び16日に熊本県熊本地方を震源とする震度7の地震が連続して発生し、熊本市、益城町、南阿蘇村などで家屋倒壊や法面崩壊等の甚大な被害をもたらしました。さらに、台風10号をはじめ、度重なる台風の襲来によりまして、北海道、東北地方、九州地方を中心に、甚大な人的被害、家屋被害が発生しております。犠牲になられました方々に深い哀悼の意を表しますとともに、被災されました多くの皆様に、心からお見舞いを申し上げます。一日も早い復旧・復興をお祈りいたします。

岡山県では、大型観光企画「晴れの国おかやまディスプレイネーションキャンペーン」が県下各地で展開されるなど、中四国の要をなす鉄道網、県内全線が開通した高速道路網など恵まれた交通基盤を生かし、観光客の誘致に力点を置いた取組が重点的に進められています。県内には、白壁の美しい町並みを残す倉敷美観地区、五重塔の備中国分寺、古代の土木遺産である山城「鬼の城」や大規模な古墳群を擁する吉備路、大山・蒜山の山並みを背景に雄大なパノラマを堪能できる蒜山高原、中国山地の山懐で落ち着いた風情の温泉地である美作三湯、さらに天空の山城の一つでNHK大河ドラマ「真田丸」のタイトルバックにもなっている備中松山城など、様々な楽しみ方のできる観光地が盛りだくさんです。また、旧国鉄津山機関車庫や旧山陽鉄道により建設されたアーチ橋群をはじめとする鉄道遺産、土木学会選奨土木遺産に選ばれた京橋（岡山市）など、明治・大正期の土木の先人が残された足跡の数々もご覧いただくことができます。

これら多くの観光スポットにあって一番のおすすめは、何といっても岡山後楽園です。岡山後楽園は日本三名園の一つに数えられ、岡山市内を流れる旭川をはさみ、岡山城の対岸の中州に位置しています。岡山藩2代藩主池田綱政が岡山郡代官・津田永忠に命じて造らせ、1700年（元禄13年）に完成した池泉回遊式の大庭園で、江戸時代の姿を大きく変えることなく今日に受け継がれています。

昨年は外国人観光客の増加や岡山城との連携イベントの効果により、入園者数が81万7千人と15年ぶりに80万人を突破しました。外国人入園者は33%増の9万8千人と過去最多を更新しております。ミシュラン社のガイドブック日本版で最高評価の三つ星を獲得していることや当時の円安を背景にした訪日ブームにも後押しされ、インバウンドの取り込みにも成功した形となりました。また、隣接する岡山城との連携の取組を進め、昨年は夜のライトアップイベント「幻想庭園」と「烏城桃源郷」を夏、秋に同時開催し、12月にも「和のおもてなし」と銘打った趣ある行事を展開しました。さらに今年度はディスプレイーションキャンペーンに合わせ、新緑の美しい春にも両イベントを同時開催しております。会員の皆様には、春夏秋冬、四季折々の魅力があふれる岡山後楽園に是非おいでください。皆様のご期待に添えますよう、おもてなしに磨きをかけてお待ちしております。

岡山支部の近況ですが、会員数は岡山大学、岡山県、(株)大本組を中心に60～70人で推移しておりますが、20代、30代の若手は10人前後と少なく、全体として高齢化が進んでいます。今年度の会員の異動につきましては、春の定期異動などにより国土交通省の山下英夫氏（H18）が転出されており、(株)大本組の高橋英徳氏（H3）と(株)エイト日本技術開発の福島康弘氏（H11）の2名の方に転入いただきました。当支部では、毎年、6月と11月の2回、幅広い年代の方々が集い和気あいあいの雰囲気の中で懇親会を開催しております。本年も6月3日に、教室から川崎雅史先生、服部篤史先生のお二方をお招きし、支部総会を兼ねた前期の懇親会が盛大に開催されました。川崎先生からは、本学の近況として、すべて英語で講義を行う国際コースが設けられ留学生との議論を通して切磋琢磨するなど、グローバルなセンスを養う環境で熱心に学業に励む後輩の皆さんのお話を拝聴し、昭和の時代の学生には想像できない程の大きな変化に感嘆いたしました。岡山支部の懇親会は、県外からのご参加も大歓迎ですので、皆様お気軽に足をお運びいただければと願っております。

最後になりましたが、会員の皆様のますますのご活躍と京土会のご発展をお祈り申し上げますとともに、支部活動へのご支援をお願いし、岡山支部からの近況報告とさせていただきます。

広島支部

幹事（H9）印 居 孝 之

広島支部の近況をご報告します。

今年度の支部総会及び懇親会を、去る6月22日に開催いたしました。

支部会員数は現在111名で、異動・転出などにより、昨年より若干増加となりました。今年度の総会には、昨年度より10名増えて43名の方々にご参加いただき、盛会となりました。

総会では、中川支部長（S50）挨拶の後、幹事長について、吉岡一郎様に代わり、菅島章文様に交代することを皆様の賛同により承認いただきました。

広島支部総会では、近年は講師を総会にお招きし、自由なテーマでご講演をいただいておりますが、今年度は、会員同士の懇親をより深めていただくため、講演の時間に代えて、懇親会の時間をより多くとることにいたしました。

総会後の懇親会は、中川支部長の乾杯の音頭で始まりました。途中、井上本部評議員による京土会本部総会の報告や、新規加入者の方々などの挨拶がありました。

今年度の新規加入者として、国土交通省中国地方整備局の川嶋直樹様（S57）、渡邊泰也様（S60）、岡本雅之様（H16）、鈴置真央様（H18）、前田建設工業(株)の細川雅則様（S61）、東洋建設(株)の角谷竜二様（S62）に自己紹介を兼ねた近況報告をいただき、さらなる会員相互の交流のきっかけとすることができました。

今年度は懇親会の時間を多くとったこともあり、参加された多くの会員の方々から近況報告を聞くことができ、例年にも増して会員同士の親睦を深めることができたものと思います。

最後は、尾島勝様（S39）の挨拶で盛会裏に散会となりました。

さて、最近の広島県の状況でございますが、一昨年の8月の豪雨により発生した、広島市北部の大規模な土砂災害の被害を教訓にした、ハードとソフト両面からの防災、減災対策や、インフラ老朽化対策のための積極的な維持管理、更新などが進められている状況です。

一方、インフラ整備では、平成27年3月の中国横断自動車道尾道松江線及び、東広島・呉自動車道の全線開通により、広域的な高規格道路網が完成し、今後も国道2号バイパスや広島高速5号線事業などの広域交流・連携基盤の強化に向けた大規模プロジェクトが進められる計画です。

その他の状況といたしましては、今年5月にアメリカの現職大統領として初めて、オバマ大統領が被爆地広島を訪れ、平和記念公園で核兵器廃絶に向けた演説を行ったことは、広島でも大きな話題となりました。また、プロ野球では広島東洋カープが25年ぶりのリーグ優勝へ向け快進撃中であり、広島は大変な盛り上がりを見せております。

広島支部におきましては、今後とも会員相互が一致団結してまいります。

最後に京土会会員皆様方の益々のご活躍と会のご発展をお祈りするとともに、支部活動へのご支援をお願いし近況報告とします。

山口支部

支部長 (56, 58) 関根 雅彦

山口大学大学院創成科学研究科の関根雅彦と申します。本年度より、これまで6年間支部長を務められた三浦房紀先生から支部長を引き継ぎました。本年、山口大学では、三浦前支部長のご退職（といっても副学長としてまだまだご活躍いただかねばなりません）や、理工学研究科から創成科学研究科への大学院改組など、節目を迎えております。私自身は、昭和58年の衛生工学専攻修了ですから、山口大学に赴任してもう33年目になります。思い返すと、山口に赴任してまだ数年目の京土会山口支部の懇親会で先輩方と温泉宿で飲んでいた時、当時たしか支部幹事をなさっていた三浦先生から近況報告を書いてくれないかと頼まれたのに、衛生工学出身で土木の主流ではないから敷居が高い、というような、今考えると理由にもならない理由でお断りしてしまったことや、それに対して三浦先生からは、ああ、仕方ないね、と優しく許していただいたことなど、当時の懇親会の光景とともに懐かしく思い出しています。その三浦先生が退職なされ、私が支部長を務めるようになったこと、時の流れを感じている次第です。

山口支部は、昨年度末現在で行政11名、大学6名、民間など12名の陣容です。本会重鎮である中川浩一名誉教授が平成9年に創設なさった山口県と県内大学との「官学勉強会」や、そこから生まれた「官学共同研究」のおかげもあり、行政と大学間のコミュニケーションは頻繁に行われており、京土会会員同士の行き来の機会も普段からあります。今後もこのような良好な関係を生かし、また民間会員との交流も深めることで、京土会を一つの核にして地域の発展に寄与していけたらと考えております。

今後ともよろしくご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

四国支部

支部長 (51, 54) 矢田部 龍一

四国支部は四国4県（徳島、高知、愛媛、香川）に居住または勤務する京土会会員で構成されています。至近の会員数は150名前後で推移しており、平成28年5月現在、150名となっています。

四国支部では、例年5月後半の土曜日に支部総会を開催して、支部会員の懇親を深めています。平成28年度は、愛媛県松山市内の「松山全日空ホテル」において5月21日に支部総会を開催しました。支部総会には支部会員37名に加え、支部外からも1名のご参加をいただきました。



支部総会では、支部長より、四国支部の維持と将来的な発展に向け、組織の若返りの観点から若手会員の支部総会への参加を促すとともに、四国4県の会員の一層の交流を図るため、今後、支部総会を例年の開催場所である香川県に限定せず、今回同様、他県で開催するなど様々な取り組みを継続的に進めていくことなどを提案しました。

その後、懇親会に移り、それぞれが久闊を叙しながら、世代を超えて懇親を深めた後、参加者全員で肩を組んで「琵琶湖周航の歌」を大合唱し、参加者の団結を固め、最後に、京土会四国支部と四国地方の発展を祈念して万歳三唱を行い、盛会のうちに幕を下ろしました。

四国支部では、過去数年間の支部総会参加者数が40名を下回っていることから、今後も、引き続き活性化に取り組み、会員同士の親睦を深めるための場である支部総会を盛り上げていきたいと考えています。

四国支部会員の皆さまには職場、学校等で四国支部総会への参加を積極的にお誘いいただくとともに、四国外の皆さまも四国に勤務する機会等がございましたら、四国支部総会にご参加くださいますよう、宜しく願いいたします。

北九州支部

幹事 (H21, H23) 福田 尚倫

北九州では、4月に東九州高速道の豊前地区が完成し、北九州－大分間が開通。福岡県東部と大分・別府の地域間の自動車交通の円滑化が進みつつある。このことは、地域の発展、観光の振興などに大きな期待を集めている。

5月には、主要先進国G7のエネルギー担当相の会合が開

かれ、北九州にとって大きな国際イベントとなった。G7一行は北九州の省エネ環境技術や水素タウン、ロボット工場を視察。先進諸国に北九州の存在を示すよい機会になった。

支部総会は7月1日に小倉のホテルにて開催（会員22名、うち出席8名）。会合では、各位の趣味の話や北九州市の歴史話など、幅広い話題で盛り上がった。



(出席者)

前列・左から 森川・藤井・垣迫支部長・垂水
後列・左から 福田・吉元・吹中・津守

支部会員短信

藤井 崇弘 (34, 36)

今年も、支部例会で若い世代と語り合えて、うれしい。国交省の風景街道活動はつづけており、5月、国東半島の杵築城下町を訪ねた。囲碁は井山裕太七冠の熱戦譜を並べ、黒白、石の戦いを楽しんでいる。一方、北九州合唱団で唱歌をうたい、健康を保っている。

垂水 國博 (49, 51)

建設業を営んでいる。社長となって30年を迎えた。大変なときもあったが、何とかやってきた。あと10年は頑張りたい。毎年、海外旅行に行っており、今年はニューヨークとラスベガスに行ってきた。

垣迫 裕俊 支部長 (52)

北九州市に入庁して40年。環境、福祉などさまざまな分野を経験し、現在は教育長をしている。教育の現場では日々いろいろなことが起き大変。今年、孫が生まれ、よく一緒に遊んでいる。

森川 真一 (54, 56)

水道局にて、水道管工事の仕事をしている。最近、出張で益城町へ行き、震災復興の手伝いをしてきた。北九州マラソンに3年連続で参加している。

吹中 範生 (H4, H6)

環境プラントの仕事をしている。東南アジアをメインと

して、海外の仕事が多い。フランスの自転車イベントに参加し、一週間で1,200kmを完走してきた。

津守 嘉彦 (H15)

昨年9月から今年の5月まで、G7エネルギー大臣会合に関する業務に従事し、水素タウンの見学準備などを担当。最近、娘と一緒に遊ぶことが多い

福田 尚倫 (H21, H23)

環境プラントの仕事をしている。最近出張でドイツに10日間行ってきた。慣れない英語で大変だったが、良い経験となった。

吉元 直子 (H23, H25)

環境プラントの仕事をしている。会社に入って4年目。7ヶ月間、福島県で災害廃棄物処理の仕事を担当し、今年の5月に北九州に戻ってきた。

福岡支部

幹事 (H24, H26) 東 章 吾

福岡支部は、北九州を除く九州全域に在住、在勤の京土会会員によって構成されており、毎年総会・懇親会を開催し、会員相互の親睦を深めています。

今年も、大学より杉浦邦征教授を来賓にお迎えし、例年通り6月初旬に福岡市にて支部総会及び懇親会を開催いたしました。総会では、杉浦先生より土木系教室の近況や就職状況等についてご紹介を頂きました。また、九州地方整備局の藤井元生副局長 (56, 58) より、熊本地震での九州地方整備局の取り組みについてご紹介を頂きました。今年は、昨年の出席者を大幅に越える23名の方にご参加を頂き、大変な盛り上がりでした。

懇親会終了後に撮影した写真をご紹介します。



支部総会の参加者は以下のとおりです。(敬称略)

三池 (29)、酒井 (38)、小倉 (44)、大津 (49)、松葉 (49)、柏木 (53)、馬場 (54)、山下 (54)、山中 (54)、内山 (56)、

藤井 (56), 千田 (57), 満島 (58), 大本 (59), 森井 (62), 梅本 (H2), 後藤 (H2), 堀口 (H2), 本郷 (H5), 梶田 (H6), 竹田 (H8) 源城 (H12), 東 (H24)

九州の主な動きに話題は移りますが、4月14日21時26分頃、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード6.5の地震が発生し、九州地方では初めて最大震度7を観測しました。さらに、その二日後の4月16日1時25分頃には、同地方を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生し、再び最大震度7を観測したことで、熊本県益城町をはじめ各地の被害がさらに拡大することとなりました。

気象庁は、4月16日の地震の発生を受けて、今回の一連の地震活動を「平成28年(2016年)熊本地震」と命名しました。熊本地震では、過去に例を見ないほどの数の余震が発生しており(7月12日時点で震度1以上を観測した地震が1,879回発生)、震度6弱以上を観測した地震は7回にのぼります。

熊本地震を受けて、九州地方整備局では、前震の発生直後から災害対策本部を立ち上げ、国土交通省との連携を図りながら、現地での自治体支援、避難者支援及び各種被害調査等を実施しました。

また、九州の交通の大動脈である九州新幹線及び九州自動車道は、地震発生以降、運転停止及び一部区間通行止めとしておりましたが、それぞれ4月27日、29日には運転再開及び全線開通しております。

上記の通り社会インフラの復旧は着実に進んでいるものの、7月現在、依然として避難生活を送られている方々が数多くいらっしゃいます。仮設住宅が次々に建設され、被災者の方々の居住環境は徐々に回復されつつありますが、今後も、一日も早く被災者の方々にこれまでの日常を取り戻して頂けるような復旧対策が望まれます。

最後に、福岡支部のご連絡先についてご案内いたします。懇親会などの支部行事のご連絡は京土会の会員名簿から九州在住在勤者を抽出してお送りしております。ご案内をお届けできていない方は、お手数ですが下記の担当者までご連絡をお願い致します。

連絡先

〒810-8720 福岡市中央区渡辺通2丁目1番82号
九州電力(株) 技術本部 原子力グループ 東 章吾
TEL : (092) 726-1752 FAX : (092) 771-9541
Email: shogo_higashi@kyuden.co.jp